

昭和二十年々頭の文樂座

五松園主人記述

元旦初日めでたく開演したる淨瑠璃城文樂座、最初の外題は

○出陣

(西亭作詞並作曲、桜茂都陸平振附)

巴御前 (相生大) 夫大 夫大 喜吉 五
木曾義仲 演大 夫夫 清二 郎 藏
郎 獄 大 夫夫 新吉 三 郎 邦 荘
ツ (津磨大) 夫夫 多 二 郎 葵 三
呂松島大 夫夫 叶仙 太 郎 大
和大 夫夫 松紋 太 郎 大
軍兵大ぜい 郎 大

○伽羅先代萩 第六

▼竹の間の段
御殿の段輔
小冲八政千鶴喜代
牧井沙岡松鶴喜代
小兵紋光光次
吉司造郎夫次

重大夫
仙系
忍び
大前門
多三郎
造

新作出陣には多大の期待をかけ居たるに或る事故の爲遲延したれば概

説して外題の内容を紹介し、床本抄を掲記して批評に代ゆ。

▼暴戾なる平家追討の令旨を受けたる木曾義仲の出陣に取材し、配するに勇にして美なる巴御前の奮戦を潤色し前段を能舞臺とし巴の切な

る旨を容れて出陣を許す義仲が首途に當り、とも天神地祇に征戰

完途の祈願を爲す一條を第一景に置き。後半は木曾軍が必勝信念の下

轟波に俱利迦羅等に寡兵よく大軍を破りたる合戦の模様を巴御前の物語り的に或は寫實的に秋の高原の舞臺面を背景として夢幻的化したる一小史傳の所作なり。大敵と言へども恐れぬ必勝の信念、敬神尊祖の美德、また勇なる中に情に篤き皇軍の武士道精神を不知不識の中に昂揚する新作新文字！。

▼床本抄 今ぞ時得し出陣の、今ぞ時得し出陣の、壽永の秋の嬉しさよ。されば保元も夢の跡。雨露に幾年木曾木立。今日ぞ錦の晴衣、こ

れは清和源氏の嫡流、木曾冠者義仲にて候、さもて平家の一族、月に浮かれ花に戲れ、奢侈車檻に四海亂れ、我意暴戾に宸襟を憚まし奉る事、沙汰の限りにあるべき所畏くも今度、逆徒追討の令旨を賜りて候さらば疾く出陣致して寂慮を安んじ奉らばやと存じ候(中略)皇威に背く逆徒ばら鎌め給へと祈願ある。軍を進めて東國や轉々伊勢路の悪鬼共、その時田村將軍は、其の時田村將軍は、無勢を以つて鬼神が中無ニ無三に割つて入り、八面六臂の勢に、惡鬼忽ち亡びけり。人間業にあらざりし、神の御業に外ならず、神の御業に外ならず。これぞ八洲の神軍、これぞ誠の神の國。御加護の程ぞ畏けれ、いざ／＼故智に我れも亦。尊き令旨を畏みて、今出陣の門出に祈り拜せん萬神、祈り拜せんよろづ神。

重大夫は明治二十四年十二月二代目竹本越路大夫(後の攝津大掾)に入門、修養鍛錬舞臺生活の永き事現櫓下古馴大夫(明治二十二年三月七代目竹本綱大夫に入門)と相伯仲の櫓下有資格者にして美聲を以て聞へしが本年七十五歳はつきり聲量と體力の衰頽を確認せしめた。併し淨瑠璃は聲を威張るものにあり又體格の偉大強健を誇るものにもあらず、聲自慢の力を有し乍ら其れを使用の技術に熟達せざるべからずなど云ふは重

大夫に對しては釋迦に説法……時は今、大戦争の頂點。攻勢轉移の緊迫時なり。武力・經濟・思想に克服せねばならぬ折勢も折。鶴喜代君の糧食問題は直に國民の體力思想の問題に影響する喫緊事である。日本一の重大夫は總決算を茲に語込み聽衆に徹底せしめたか納得せしめたか。決戦下大威張りの淨瑠璃人形浄居を文樂に持あぐませては國家保護の恩恵に報る途に背く輩になる、私的利害にあらず公的君國に盡くす道を深く考慮すべき義務責任が因協會にも文樂にも出演大夫三昧人形にも當然ありと思ふ。鶴喜代の辛抱を見て直に自己克服の助けとし反省の鑑と仕たきものである。其の語方が即はちそれでなくてはならない、破裂する程の熱湯がたぎり突貫く程の権力が汎濫して居たきものなり、而かもそれが男まさりの女性政岡の性格を壊してはならない。戦時淨瑠璃の究極、藝の最終點は茲だ、これで人を感動せしめ、世を救ふべきである。團平流が漸次滅亡し今日にては仙糸、助三郎の二人が日本に残つて居るのみ、自重を望む。

◎假名手本忠臣蔵

第七祇園一力茶屋の段

主	由良之助	力	重喜	彌仲	申仲	申亭
か	五太太					
司富	呂八	伊松	濱源	呂津	隅磨	大
大大	和十	達島	大大	大大	大大	夫
夫夫夫夫夫夫夫夫						
常	大大	紋大玉	藤紋	文玉		
ぜぜ	十	せ	太			
次	いい	郎い	枝一	郎枝	助	

由良之助は更に晝行燈式を發揮せぬと邪智深き九大夫に大事の計畫を看破されはせぬかと氣遣ふたが幸ひ老練なりと雖も九大夫がそこ迄の肚を持合せざりしものゝ如く杞憂であつた全く僥倖。が作意は「四十に餘つて色狂ひ馬鹿者よ氣違ひよ」に聞かすべきであらう。兎に角九大夫は一筋縄で行かぬ奸狡邪智に抜きん出て居り、由良之助がゆら／＼して居れば其の對照一段と面白くはあるまいか？茲が即ち藝であり作家の期待にあらざるべき歎一考を要せん。力彌は軽い役と侮りカクキが輕卒に満ぎた無論後人が語路に合はして加筆せし贅辯であり、不斷力彌の憤激が思はず出たとも云はるべきも直前に「急用あつてか密かに／＼」と父由良之助が注意する其の言下に大聲力タキは大事の場面に動搖を起す不謹慎輕卒の力彌である。更に重き役を受持ち勉強鍛錬錦衣郷に歸り昭和の淨瑠璃藝術となり得たる立派な誇りを見せねばならぬ長州男兒にあらずや、刻苦徹底的研鑽を望む。次ぎに彌五郎。三面四方から吟味打診して先づ斯界の寵兒、勉強次第で先者津大夫を凌駕し得るかも知れぬ器量がある。無論聲が入る……頭が第一、青年大夫の第一人者……大機晚成を禱る。

おかるは文樂一の聲量家と稱する人あり、或は然らん。大夫は聲がもとである、而かもそれは天品に鍛錬を加へたもので遣へば遣ふに從つて無限に出て来る豊富なものであつてほし

平九	伴太	内	司富	玉	徳
右衛門			相生	大	夫夫
前			喜吉	清	大
後			左衛門	五郎	夫
			門郎	八	夫
			松造	門	玉

い。おかるは未だ左様な榮耀は云はれない、東京で素的な好評なれど大阪ではそれ程でもなく土音が素義臭いと云ふ評判幸ひ相三味喜左衛門丈が皮肉家であるから聲に偏せず技藝圓熟完成せば偉大なる者であらう。精進々々。**九大夫**は槽下金杉古轍に續く古參者稀有の美聲家、聲をつくりてかみ殺す様に聞ゆ故に人形の性格が違つて来る、多年の経験に徴し是非工夫を望む。**平右衛門**は他の何役に對しても遜色なく役前結構と評論して善し、要するに各々非常の凸凹差隔なく相應捕ふてあつたから掛合としては先づ無事平穏と云ふべし。

◎壽式三番叟(夜之部)

翁 千 番叟	歲 南 部 大 夫	翁 千 番叟	歲 南 部 大 夫
三番叟	住 七 大 夫	三番叟	住 七 大 夫
五番叟	五 大 夫	五番叟	五 大 夫
六番叟	六 大 夫	六番叟	六 大 夫
七番叟	七 大 夫	七番叟	七 大 夫
八番叟	八 大 夫	八番叟	八 大 夫
九番叟	九 大 夫	九番叟	九 大 夫
十番叟	十 大 夫	十番叟	十 大 夫
十一番叟	十一 大 夫	十一番叟	十一 大 夫
十二番叟	十二 大 夫	十二番叟	十二 大 夫
十三番叟	十三 大 夫	十三番叟	十三 大 夫
十四番叟	十四 大 夫	十四番叟	十四 大 夫
十五番叟	十五 大 夫	十五番叟	十五 大 夫
十六番叟	十六 大 夫	十六番叟	十六 大 夫
十七番叟	十七 大 夫	十七番叟	十七 大 夫
十八番叟	十八 大 夫	十八番叟	十八 大 夫
十九番叟	十九 大 夫	十九番叟	十九 大 夫
二十番叟	二十 大 夫	二十番叟	二十 大 夫
廿番叟	廿 大 夫	廿番叟	廿 大 夫
廿一番叟	廿一 大 夫	廿一番叟	廿一 大 夫
廿二番叟	廿二 大 夫	廿二番叟	廿二 大 夫
廿三番叟	廿三 大 夫	廿三番叟	廿三 大 夫
廿四番叟	廿四 大 夫	廿四番叟	廿四 大 夫
廿五番叟	廿五 大 夫	廿五番叟	廿五 大 夫
廿六番叟	廿六 大 夫	廿六番叟	廿六 大 夫
廿七番叟	廿七 大 夫	廿七番叟	廿七 大 夫
廿八番叟	廿八 大 夫	廿八番叟	廿八 大 夫
廿九番叟	廿九 大 夫	廿九番叟	廿九 大 夫
三十番叟	三十 大 夫	三十番叟	三十 大 夫
卅一番叟	卅一 大 夫	卅一番叟	卅一 大 夫
卅二番叟	卅二 大 夫	卅二番叟	卅二 大 夫
卅三番叟	卅三 大 夫	卅三番叟	卅三 大 夫
卅四番叟	卅四 大 夫	卅四番叟	卅四 大 夫
卅五番叟	卅五 大 夫	卅五番叟	卅五 大 夫
卅六番叟	卅六 大 夫	卅六番叟	卅六 大 夫
卅七番叟	卅七 大 夫	卅七番叟	卅七 大 夫
卅八番叟	卅八 大 夫	卅八番叟	卅八 大 夫
卅九番叟	卅九 大 夫	卅九番叟	卅九 大 夫
四十番叟	四十 大 夫	四十番叟	四十 大 夫
四十一番叟	四十一 大 夫	四十一番叟	四十一 大 夫
四十二番叟	四十二 大 夫	四十二番叟	四十二 大 夫
四十三番叟	四十三 大 夫	四十三番叟	四十三 大 夫
四十四番叟	四十四 大 夫	四十四番叟	四十四 大 夫
四十五番叟	四十五 大 夫	四十五番叟	四十五 大 夫
四十六番叟	四十六 大 夫	四十六番叟	四十六 大 夫
四十七番叟	四十七 大 夫	四十七番叟	四十七 大 夫
四十八番叟	四十八 大 夫	四十八番叟	四十八 大 夫
四十九番叟	四十九 大 夫	四十九番叟	四十九 大 夫
五十番叟	五十 大 夫	五十番叟	五十 大 夫
五十一番叟	五十一 大 夫	五十一番叟	五十一 大 夫
五十二番叟	五十二 大 夫	五十二番叟	五十二 大 夫
五十三番叟	五十三 大 夫	五十三番叟	五十三 大 夫
五十四番叟	五十四 大 夫	五十四番叟	五十四 大 夫
五十五番叟	五十五 大 夫	五十五番叟	五十五 大 夫
五十六番叟	五十六 大 夫	五十六番叟	五十六 大 夫
五十七番叟	五十七 大 夫	五十七番叟	五十七 大 夫
五十八番叟	五十八 大 夫	五十八番叟	五十八 大 夫
五十九番叟	五十九 大 夫	五十九番叟	五十九 大 夫
六十番叟	六十 大 夫	六十番叟	六十 大 夫
六十一番叟	六十一 大 夫	六十一番叟	六十一 大 夫
六十二番叟	六十二 大 夫	六十二番叟	六十二 大 夫
六十三番叟	六十三 大 夫	六十三番叟	六十三 大 夫
六十四番叟	六十四 大 夫	六十四番叟	六十四 大 夫
六十五番叟	六十五 大 夫	六十五番叟	六十五 大 夫
六十六番叟	六十六 大 夫	六十六番叟	六十六 大 夫
六十七番叟	六十七 大 夫	六十七番叟	六十七 大 夫
六十八番叟	六十八 大 夫	六十八番叟	六十八 大 夫
六十九番叟	六十九 大 夫	六十九番叟	六十九 大 夫
七十番叟	七十 大 夫	七十番叟	七十 大 夫
七十一番叟	七十一 大 夫	七十一番叟	七十一 大 夫
七十二番叟	七十二 大 夫	七十二番叟	七十二 大 夫
七十三番叟	七十三 大 夫	七十三番叟	七十三 大 夫
七十四番叟	七十四 大 夫	七十四番叟	七十四 大 夫
七十五番叟	七十五 大 夫	七十五番叟	七十五 大 夫
七十六番叟	七十六 大 夫	七十六番叟	七十六 大 夫
七十七番叟	七十七 大 夫	七十七番叟	七十七 大 夫
七十八番叟	七十八 大 夫	七十八番叟	七十八 大 夫
七十九番叟	七十九 大 夫	七十九番叟	七十九 大 夫
八十番叟	八十 大 夫	八十番叟	八十 大 夫
八十一番叟	八十一 大 夫	八十一番叟	八十一 大 夫
八十二番叟	八十二 大 夫	八十二番叟	八十二 大 夫
八十三番叟	八十三 大 夫	八十三番叟	八十三 大 夫
八十四番叟	八十四 大 夫	八十四番叟	八十四 大 夫
八十五番叟	八十五 大 夫	八十五番叟	八十五 大 夫
八十六番叟	八十六 大 夫	八十六番叟	八十六 大 夫
八十七番叟	八十七 大 夫	八十七番叟	八十七 大 夫
八十八番叟	八十八 大 夫	八十八番叟	八十八 大 夫
八十九番叟	八十九 大 夫	八十九番叟	八十九 大 夫
九十番叟	九十 大 夫	九十番叟	九十 大 夫
九十一番叟	九十一 大 夫	九十一番叟	九十一 大 夫
九十二番叟	九十二 大 夫	九十二番叟	九十二 大 夫
九十三番叟	九十三 大 夫	九十三番叟	九十三 大 夫
九十四番叟	九十四 大 夫	九十四番叟	九十四 大 夫
九十五番叟	九十五 大 夫	九十五番叟	九十五 大 夫
九十六番叟	九十六 大 夫	九十六番叟	九十六 大 夫
九十七番叟	九十七 大 夫	九十七番叟	九十七 大 夫
九十八番叟	九十八 大 夫	九十八番叟	九十八 大 夫
九十九番叟	九十九 大 夫	九十九番叟	九十九 大 夫
一百番叟	一百 大 夫	一百番叟	一百 大 夫

淨瑠璃人形芝居の基根とされてゐるが誰彼の差別なく皆三番叟の形に喰はれて了つた。成程文樂座(本家)が人形淨瑠璃と觸れ出す理由根據が解つた様な氣もした。大夫も三味線も憤激せねばなるまい。人形の改革は時を争ふ緊要事である。

近松門左衛門の天神記を藍本として趣向を凝らし技工を弄し、二段目松洛、三段目千柳、四段目出雲執筆せりと聞く。延享三年八月二十一日竹本座初演に於て竹本島大夫この四段目を語り好評を博せし以來毎に名匠の所演にて屈指の佳作と持流される。記者は三代目大隅、二代目越路(大掾)、三代目越路藝院受賞の名譽者豊竹古蘋大夫以外の大家を聞かず。大隅は一時二十分。大掾、越路は一時二十五分乃至四十分、古蘋師は前清六時代より大隅同様位と覺へしに今回は一時三十五分を要したりと覺ゆ、蓋し文章の意味模様を語り人形の性格を描寫せんとすれば時間の延長は止むを得ざるべき歟。その他語り貫く所、又は語り捨つる所など前代未聞の淨瑠璃藝術家と稱すべきなり、然し乍ら百尺竿頭一步を進めて其の女房たる清六文の三味線に就いて云はしめよ。素人耳には素氣なく意味不鮮明、床上の姿勢何となく甚だ水臭き感ありと多少の遺憾を禁じ得ざりし。惜矣哉。

十種香の段
弧火の段
南五部大夫
七八三大夫
平

琴綱寛

治

太兵五

造郎

十八音より

つづく

形淨瑠璃といふも無理からざる事歟。

「え」(ヒ)、日向の一部と薩摩、大隅はえ(ヒ)である。何故に重母音「ア、イ」がある地方では「ヤ」となり、ある地方ではエとなるか、これに答へてくれるものは音韻變化の概念を指いて他にはない。

小謙白須文治
南五部大夫
七八三大夫
平

兵紋小紋文玉

寛

太兵五

造郎

吉司郎助弘

十八音より

つづく

南部は東京で聲をとられたとの噂あれど大體それ程の美聲でない天性で修行も未だ積んでは居ない大夫なるが故に近代の

名人攝津大掾の十種香が耳にある者は決して左程に敬意を拂はざるべし。例へば「翅がほし、羽がほし、飛んで行きたい知らせたい、逢ひたい見たい」などの邊を一息にやつた

と云はれる大掾の息を知つて居るや、修行したか實現し得るか。茲に大掾の値打ありて比較になり難きものであらう。寛

治郎は文の意味、人形の動作を彈かんとして頭や體の動搖が目障り考慮すべきであらう▲狐火は七五三の聲が自由を束縛さ

されたかの感あり、これは大夫の活躍に任せ天品の限りを盡くさして遣りたいものぢやが、それには自ら程があり又修行

が入る。所謂テツを云爲するは野暮の極と一笑に付する今日なれどこれが風格氣品に影響する以上は此の矯正是絶對的の

ものであり、藝の生命保全である。七五三の成否は寧ろ糸綱造師の責任にあると思ふ。精進大成を望む▲喜壽文五郎の八

重垣姫、千代。七十六歳の榮三の松王などは共に至寶であるが惜矣哉續く者なし、紋十郎のおかる、玉助の大星は一座に傑出して居た。快氣した門造の九大夫も目出度く、成る程人

化する傾向をもつ甲の地方に對し乙の地方では同じく副音でその音節を己に近く引き寄せて一つの長音にしたのである丙の地方では更に短音化的傾向がある。甲の地方のは乙、丙の地方より一層強く口蓋化をある種の音節の上に及ぼす傾向を有したのである。
それ故九州地方にてクマガイを發音すれば種子ヶ島を除いては全部「クマガエ」「クマガヤ」となるのは明白で、これを果して正しいといへるだらうか、参考に九州地方の「エ」と「ヤ」との分布圖を略す

分布圖は明かに「ヤ」は「エ」に周圍的に馬蹄形に包围されてゐる。即ち「エ」が壹岐對馬から肥前本土の西端を掠め、天草の一端に頭を出し葦北に上陸して薩摩に入り大隅から日向、豊後、豊前、筑紫と北上してゐる。依方言研究第四號原田芳起氏「音韻傾向より見たる九州西南方言」これを以てしても九州地にては寧ろくまかや又はくまがえが正しいと云へ然しこれは九州だけの話である。